今月の
ブックトーク

10月（神無月）「鉄道の日」

前田 由紀
／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

国土交通省のHPによると、明治5年（1872年）10月14日新橋～横浜間に日本で最初の鉄道が開通したことを受け、1994年にその誕生と発展を記念し、毎年10月14日を「鉄道の日」と定めたとあります。鉄道開通からわずか150数年しか経っていませんが、現在、通勤通学、物流と時刻通りに運行する日本の大動脈として重要なインフラとなり、特に新幹線は、高速性、安全性、快適性において世界に誇る技術の粋を示しています。

最初は、芥川龍之介の短編『**蜜柑**』（1919）。当時は蒸気機関車で、黒煙が窓を開けると客車に入ってきました。ある冬の日暮れ、疲労と倦怠で物憂い主人公は突然乗車してきた素朴な小娘がそばに座り、窓を開けて踏切にいて見送る弟と思われる男の子たちに蜜柑を車窓から投げるのを見て、「或得体の知れない朗な心もちが沸き上がって来る」のでした。ほのぼのとした光景がこちらにもはっきりと見えてきます。



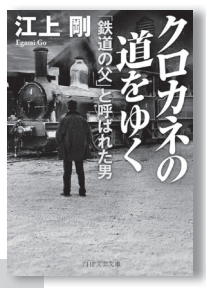
芥川 竜之介・作
岩波書店（岩波文庫）

次は、新幹線の清掃のお話『**新幹線お掃除の天使たち:「世界一の現場力」はどう生まれたか?**』です。たった7分間で新幹線をピカピカにしてしまう清掃会社のチームワークは、「世界一の現場力」として国内外で称賛されています。無言の説法として「汚れたところを一心にきれいにしようとする姿は、周囲の人たちが思わず手をあわせたくなるほど尊く、気高いもの」とされるようです。旅行客に常に快適に過ごしていただくために現場で一人ひとりが改善工夫を重ねる姿勢は実に清々しいものです。



遠藤 功・著
あさ出版

では、日本の鉄道を開通させたのは誰なのか。『**クロカネの道をゆく:「鉄道の父」と呼ばれた男**』を読んでみましょう。主人公の井上勝（まさる）は、幕末極秘に英国のロンドン大学に留学した長州の若き藩士5名（長州ファイブ）の一人です。他に、伊藤博文、井上馨らがおり、後に皆が明治政府で活躍する中心メンバーとなります。国禁の外国への航行は困難を極めますが、ロンドン大学の教授宅に温かく迎えられ、勉学に邁進し、帰国後、井上は鉄道（クロカネの道）を日本中に開通させるべく若き英国の技師たちの協力もあり、次々と短期間に鉄道路線を伸ばしていきます。歴史上の人物たちが生き生きと描かれていて、熱い情熱は事を成すことを示しています。



江上 剛・著
PHP研究所（PHP文芸文庫）

現在では、少子高齢化、地方過疎化の影響で、地方ローカル鉄道の廃線が目立つようになりました。地方で鉄道をいかに存続させていくか。『**ガチャコン電車血風録:地方ローカル鉄道再生の物語**』で滋賀県の近江鉄道の再生化をモデルに考えてみましょう。上下分離方式で「下部の鉄道インフラを自治体など公共が保有し、上部の鉄道の運行については民間企業に委ねる」ことにし、県庁と市町村の自治体、鉄道会社との白熱の折衝の過程が記されており、行政の役割を知ることができます。論理的なデータをもとに、あらゆる方策を想定し、着地点を探るプロセスは、課題解決方法としてほかの分野でも十分に応用できそうです。



土井 勉・著
岩波書店（岩波ジュニア新書）

※「今月のブックトーク」「図書館のこよみ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご活用ください。